

成ともあをばのもみ汁にて、入用ほどこねくはせてよし、右のあはせ粉當分のくらゐに仕をく時は、うすゑの鳥にはつたいをませて、五分ゑ四分ゑ、そのぶんりやうなにほどのかげんもなるべし、

一つみゑといふは、あは、ひゑ、きび、米、ゑのごまくるみ、此類にてかふ鳥なり、つみゑの鳥は何にても水をかふなり、その外木のみ、草のみ、むしるいこのむ鳥あれども、むつかしき事なれば、こゝろやすきゑにてかひつけるなり、

一 玄らゑといふは、すりゑにあをみを入ずして、生ゑと粉とくるみ、此三色ばかりをいふ、さしゑとは、ちいさき間はひとりぐいせざるゆへ、へらのさきにゑを付く、めくはする事をいふ、

小鳥煩ふに藥の事

一 諸鳥ゑをくはぬ事あらば、成ほどからきとうがらしをきざみ、水につけ、その水あかくなる水を、とうがらしともにもよくに入かふべし、其みづをすいてゑにつくなり、○下略

〔諸禽萬益集上〕粉仕方の事

粉は黒米壹升、糠壹升五合、これを煎粉に挽、毛水囊にてふるひ用ゆ、よき鳥はこまかき水囊にてふるひ、あしき鳥はあらしきをもつてふるふ、しらざるものは米三合、糠一升と心得たり、是には鳥屋の傳にしてとるに足らず、米は勢つよし、糠はよはし、然るにぬかあまりに多すれば、甚諸鳥によろしからず、

餌摺様の事

生餌は常にあらくこなしをくべし、摺る時にいたりて、これをほうろくにてかはく迄煎、夫より播盆に入れて砂のごとくにすり、菜を入れてまたすり、水にて和らげ、粉を入交て飼なり、粉を入れてよりすることなかれ、胡桃の入る餌は、粉を入れて後又摺べし、胡桃入らずして粉すりかへば、必糞け